

海外派遣終了報告書

氏名：岡 晋

所属：総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

海外派遣先国名：中華人民共和国

海外派遣先大学（機関）名：雲南大学・雲南省 民族研究院

海外派遣期間：7 月 10 日～8 月 22 日

海外派遣先大学（機関）について

雲南省の省都昆明市に拠点をもつ雲南大学は、中国の西南地域では最も古い総合大学で、2001 年から国家重点級大学に指定されている。1923 年 4 月に私立東陸大学として開学した雲南大学は、1930 年に雲南省立の大学となり、1932 年 9 月に名前を現在と同じ雲南大学（省立）へと改名し、1938 年に国立大学へと昇格した。

雲南大学が国立大化した 1938 年は、中国の大学および高等研究機関が日中戦争による戦禍を逃れるために四川省、雲南省といった西部地域へと移設された時期である。この日中戦争の時期には昆明にも第一線で活躍していた多くの研究者が全国から避難してきた。雲南大学の場合、私立燕京大学の疎開に伴って、その社会科学系の教授陣を受け入れ、彼らの協力のもとで社会科学系を創設した。さらに 1939 年には雲南大学・燕京大学社会学実地調査工作站を設立して中国の文化人類学（民族学）研究の発展に大きく貢献した。

雲南大学・燕京大学社会学実地調査工作站を設置したのはアメリカで文化人類学を学んできた呉文藻で、彼のもとには林耀華（アメリカ留学）、費孝通（イギリス留学）、許烺光（イギリス留学）、陶雲逵（ドイツ留学）等、海外で最新の文化人類学（社会人類学、民族学）を学んだ研究者を中心に数多くの研究者が集まり、彼らは非漢族が多く居住する雲南省という地の利を活かした中国の民族学（人類学）研究を展開していった。また 1942 年には、方国瑜によって西南文化研究室が設置され、顧頡剛、費孝通、陶雲逵といった研究者も加わって、西南地域の歴史研究が民族学研究と密接な関係を持ちながら発展していった。このように、雲南大学は中国における民族研究や歴史研究の発展期にその舞台となり、その指導者や卒業生たちはその後も各学界に強い影響力を及ぼしてきた。

雲南大学・雲南省民族研究院は、雲南省教育庁の意向によって、その直属の研究機関として 2006 年 11 月に組織された。その際、雲南大学が培ってきた民族研究の歴史と実績が重視され、雲南大学がその中核となった。受入教授の方鉄教授は、雲南大学・雲南省民族研究所が設立されるまでは、雲南大学西南边疆少数民族研究センター（現在は民族研究所の一部所）の主任教授を務め、2006 年 3 月に私が雲南大学西南边疆少数民族研究センターに留学した際の受入教授でもあった。こうした縁から今回の海外派遣事業でも方鉄教授に指導を仰ぐことになった。

海外派遣前の準備

応募時期

私が海外派遣事業応募の詳細を知ったのは、中国雲南省のある農村で長期のフィールド調査を行っていたときであった。事前にその存在については知っていたものの、その時点では詳細が提示されておらず、いつ応募がはじまるのかもわからなかった。今回は、たまたまインターネット接続ができる都市まで出掛けた際に、数週間前に通知されていた海外派遣事業応募の詳細を知り、慌てて方鉄教授と打合せを行って、応募書類を揃えた。

応募に際しては、長期フィールド調査の終盤で明らかにする必要性を感じた、「これまで長期フィールド調査を行ってきた地域の社会組織や伝承、近代史が、その周辺地域とどの程度の差異をもっているのか」をテーマにし、その実施可能性について方鉄教授と相談しながら調査計画を練りあげた。

採用決定まで

調査地域についての情報収集や語学勉強については現地に長期間滞在していたため、特別な準備はしなかった。ただし、海外派遣事業採択の可否にかかわらず夏季休暇中に雲南省へ調査に出かける予定でいたため、あらかじめ雲南大学・雲南省民族研究所から発給されていた招待状で中国の訪問ビザ取得の手続きだけは済ませておいた。

採用決定から派遣直前まで

海外派遣の採用決定により、私の訪中日程が確定した。しかし、並行して他の研究プロジェクトを行っていたため、その調査日程が調整されることになり、急遽、プロジェクト遂行のために私の訪中前に私の調査地から有識者数名を日本に招き、彼らとともに複数の博物館を調査することになった（笹川科学研究助成による）。その際、訪日する中国人のビザ取得が若干遅れ、彼らの訪日日程もつられて遅れたため（また、おやしらずの治療という個人的な理由が加わったため）、海外派遣事業による訪中の日程が当初の予定よりも遅れることになった。また、上記のようなさまざまな事情があつて非常に慌ただしかったため、直前の準備もほとんどできないままに派遣先を訪れることになった。

海外派遣中の勉学・研究

海外派遣中はそのほとんどの日程を、派遣先の所在地から離れた地域でのフィールド調査に費やした。調査地点が派遣先所在地から随分と離れるため、また夏季休暇で方鉄教授も調査研究のために研究機関に不在しがちであったため、方鉄教授との懇談は入国後と出国直前の数日間に設けたのみで、文献調査とフィールド調査では、これまでに培ってきた人脈を利用する機会の方が多かった。

なお、調査の内容については、現在論文としてまとめている段階であるため、ここでは明らかにしない。

海外派遣費用について

移動費

東京（成田）から昆明への直航便が無いため、複数の経由方法のうちで最も料金が安かった香港経由で昆明に入った。やや複雑な手続きを行ったため、非常に面倒ではあったが、受入先研究機関までの往復の渡航費（ビザ代等を除く）を随分と抑えることができた。

受入先研究機関から調査地までと、調査中の移動には飛行機、乗合バス、タクシーを利用した。ちょうど夏季休暇で観光客が多かったためか、格安の中国国内線の飛行機チケットが全く手に入らず、またオイル高、円安といった世界経済の動向に左右されて、飛行機の燃料代やタクシー料金も上がっており、受入先研究機関に到着してからの移動費は予想していた以上に嵩んだ。

生活費

調査地域を訪れた時期は、鳥インフルエンザに加え、豚の奇病が流行っていたため、肉料理といえばやや割高な牛肉料理ばかりであった。豚肉が食べられないことによる牛肉需要の急増に伴って牛肉の価格が高騰し、いつもは気にも留めることもなかった食費も今回は随分と嵩んだ。

また、夏季休暇中であったために観光客が多く、観光化された都市では手ごろな（安全かつ廉価な）宿が見つからず、仕方なく高い宿に泊まることも多々あった。

海外派遣先での語学状況

海外派遣中、方鉄教授とのやり取りは主に中国標準語で行い、派遣先での生活やフィールド調査では、標準語の他に雲南語（西南漢語）やナシ語（少数民族言語）も用いた。

調査では、主にナシ族の人びとを対象としたものの、必ずしもナシ族の母語であるナシ語を利用しなかった。なぜなら、モザイク状に異なる少数民族が雑居する多民族状況下において、多くの人びとは漢語（標準語もしくは雲南語）を日常的に利用し、地域によっては漢語しか話せないナシ族の人もいるため、必然的に調査において漢語を利用する頻度が高かったためである。それでも、ときどき、漢語でのコミュニケーションが上手くとれないお年寄り（その中でもとくに女性）から話を聞く際にはナシ語を用いることもあった。ただし、私のナシ語レベルはそう高くなく、しかも農村地域において独学したナシ語であるため、地域によっては通用しないこともあった。そのため、私のナシ語があまり通用しないお年寄り対しては、現地で漢語を理解する人びとに通訳してもらった。

調査地域では、チベット語やイ語による表記も少なくないため、それらの言語についての最低限のレベルの理解が得られれば、さらに多くの収穫が得られたと思われる。

海外派遣を希望する後輩へのアドバイス

博士課程在学中に海外での調査研究を必要とする学生にとって、海外派遣事業は経済的に大きな助けになる。また海外派遣事業への応募は、事前に（一般的に考えて、日本語以外の言語で）派遣先の研究機関と連絡を取りあって諸手続を進めていく必要があるため、語学訓練とカルチャーショックを体験しながら事務手続きの煩雑さを知るといって、貴重な経験を積むことにもなる。これらの経験は、わずかなチャンスでもそれを逃さない忍耐力とチャレンジ精神を研ぎ、研究者としての活動範囲を大きく広げるもので、それはさらに国際社会の舞台に出た際の自信へと繋がるものでもある。これらの経済的、経験的な利点を考えると、語学力や研究計画に多少の無理を強いてでも、積極的に海外派遣事業に応募すべきである。

派遣先となる国や地域によって差はあると思われるが、研究機関からの受入許可や政府からの調査許可証、ビザの発給など、事前にやっておくべき諸手続は非常に煩雑であるので、応募の少なくとも1ヵ月前には受入先となる研究機関の先生と連絡を取るなどして、準備をはじめることが望ましい。